「生徒をその気にさせる」授業づくりのヒント

「総合的な学習の時間」では、従来の知識を伝達するいわゆる「教授型の授業」にかわり、生徒達が体験から自分で学ぶ「参加体験型の学習」がさかんに行われるようになりました。

そこで教師の頭を悩ませているのが、「生徒が主体となる授業づくり」、つまり、生徒のやる気をいかに起こさせ、それを持続させるか、という点でしょう。「総合的な学習の時間」を、「導入」「展開」「まとめ」の３つの部分に分けて、「生徒がその気になる授業」のためのポイントやヒントをご紹介しましょう。

◎導　入　「参加体験型学習」の世界に引き込む

「参加体験型の学習」では、生徒は授業の枠の中で自由に感じ、考える時間を与えられます。教授型にはない自由さが生徒にはさぞ好評であろうと始めたのに、「面倒くさい」「何をどうやったらいいのかわからない」と嫌がられる、という経験をお持ちの先生は少なくないのではないでしょうか。普段の授業とは異なる工夫や仕掛けを準備して、生徒の自由で活発な学習活動のようすを楽しみにしていたのに、こちらもがっかりしてしまいます。

そんなときは、「導入」について、次の点を検証してみましょう。

ポイント1　教授型の授業からの切り替え　頭も体も自由になれる空間をつくる

「教授型の授業」では、教師が「教え」生徒が「教わる」関係にあり、生徒は「先生が教える内容を理解し、覚える」ことに慣れています。しかし、生徒が主体となる「参加体験型の学習」では、進行役の教師と学習の主体である生徒が一緒に考える関係や姿勢が必要です。教授型の「教える－教わる」関係から生徒を解放し、柔軟で自由な発想ができる頭と考えを実行に移せる身軽な体となるための準備を導入で行いましょう。教室の机を撤去する、授業の最初に体を動かしたり大きな声を出す機会を作るなど、「ほかの授業とは何かが違う」と思わせる工夫を実施しましょう。「正解はないから、自由に考えて発言していいんですよ」と、はじめから宣言してしまうのも１つの方法です。

ポイント2　テーマの見せ方　自分に身近で、重要であると意識させる

課題を解決することを目的とした学習を行う場合には、自分がその課題に関わらなければならない、と生徒一人一人が意識することが大切です。「何のための活動なのか？」疑問を抱えたままでは、課題の解決策を模索するまでのさまざまな壁に立ち向かったり、考えを深め、自ら気づくことはできません。

自分の生活とは大きくかけ離れているように思える問題や課題に対し、生活の中での身近な題材を具体例として話題にするなど、生徒の視点を変え、「自分の生活と深く結びついていた非常に重要な問題である」と思わせる仕掛けを用意しましょう。

ポイント3　ゴールの見せ方　「ゴール」のイメージを示す

もう１つの大切なポイントは、学習活動の目標となる「ゴール」のイメージを示す、ということです。例えば、発表の仕方や学習の到達目標、自分たちの働きかけによって創り出される未来像です。

「ゴール」のイメージを示しておくことは、生徒の学習への意欲を持続させるだけでなく、1つ１つの学習活動の意味を生徒自身が理解し、学習活動の視点を与えることにつながります。グループで最終的にこんなものを作りたい、そのためには、これも調べたいし、これについても考えたいし、あれも作ってみたいというように、**生徒自身が学習内容を計画し、ゴールへの道筋を決めていくことができる**ようになります。そうなれば、あとは自由に活き活きと学習活動を始めるでしょう。

◎展　開　「総合的な学習の時間」＝調べ学習　ではつまらない

参加体験型の学習においては、「ねらいに沿った課題設定と手法の選択」が、「ねらい」達成の鍵を握っています。「ねらい」とは、学習を通して生徒に気づいたり学んだりしてほしいことを指し、「手法」は生徒が体験する学習活動を指します。

総合的な学習の時間では、ねらいに沿って設定された課題やテーマについて、生徒が調べ学習を行い、成果を発表するという手法をよく聞きますが、その他にも、シミュレーションゲーム、ロールプレイ、ディベート、討論会、ものづくり、企画づくりなど、さまざまな手法が考えられます。「正しい知識や情報をもとに、学習を深めてほしい」と考えれば、講義形式も手法の１つととらえることができるでしょう。

生徒が自ら学び、ねらいを達成させるためには、生徒の学びを促す「実感をともなう体験」が不可欠です。そこで、無数にある手法から何を選択するのかが、教師の重要な役割となります。

では、どのようにして手法を選択したらよいのでしょうか。

ポイント1　ねらいと生徒の現状を照らし合わせる

ねらいと生徒の現状を照らし合わせ、学習活動が生徒自身の手でより主体的かつ活発に行われ、生徒自身が学び取りやすく、その結果としてねらいを達成できそうな手法を選択します。そのためにも、生徒の様子をよく観察しておくことが大切です。

ポイント2　生徒の思考の過程を頭に描いて組み立てる

ねらい達成までには、いくつかの手法を組み立てることが必要でしょう。手法の内容ばかりに気をとられず、生徒の思考の過程を注意深く想像し、無理のない組み立てを考えましょう。

ポイント3　「こころ」と「あたま」のバランス

手法によって、生徒に要求している能力はさまざまです。感性や感情に訴え、共感的理解を重視する「こころ」を使う手法と、科学的で冷静な判断を要するつまり「あたま」を使う手法とのバランスも大切にしたい要素の1つです。

実物を用意する

環境に配慮した「エコグッズ」は、教師がお店を何軒も回って、授業用に購入。

「実物」にまさるものはなし。生徒は食い入るように見て回り、使ってみる人もでてきます。

手足を動かし、五感を刺激する

一週間分の教室のゴミ箱を開いてみる。臭い、汚い、重いなど五感はもちろん、体全体を動かして、持ったり立ったり。様々な感覚への刺激が実感となって、考えに広がりと深さを与えます。

ワークシートの効果的な活用

ワークシートは、生徒の学習活動をサポートし、活発にしてくれます。
学習活動の課題や目標を明確にするだけでなく、課題にどう取り組めばよいのか、その道筋がわかるようなものを作成すれば、ワークシートが生徒の自主的な学習活動を促すいわば「エスコート役」となるでしょう。ワークシートの質問に沿って課題に取り組むことで、情報や意見が整理され、考えが深まり、目標が達成されるようになります。

しかし、目標達成までの段階や記入欄が多くなりすぎると、生徒たちは穴埋め作業に熱中してしまい、自分で考えたり、友達同士で討論することを忘れてしまいがちなので、作成の際には注意が必要です。